



教員免許取得のための介護等体験 ～施設での体験から学生が学ぶもの～



この介護等体験において、大学生が感じたこと、学んだことを一部抜粋しご紹介いたします。令和5年度は、県内185施設、706名の大学生が介護等体験を行いました。ご協力ありがとうございました。

●利用者さんに一方的に話しかけていいものなのかという戸惑いがあり、職員の方が利用者さんとどのようにかかわっているのか、注意深く観察した。頻繁に名前を呼びかけながら話しかけ、複雑な疑問形ではなく「○○ですね」と共感したり、YES か NO で答えることができる質問をすることでコミュニケーションをとっていると分かった。私も真似するように利用者さんと話してみると、会話としての返答はなくても笑顔で返してくださり、ようやく通じ合えたような気がして本当に嬉しかった。

また、歌を歌っておられる方と過ごしたときは、聞くだけでなく一緒に歌ってみると、覗き込むように目を合わせてくださりニコニコとしてくださりました。コミュニケーションは会話だけでなく、このような形もあるのだと学ぶことができました。心が通じ合えた時の喜びは他では味わえないものがあった。私が将来、中学校の教員になったときにも、個性豊かでさまざまな特性を持った生徒たちとかかわっていくだろう。今回の介護等体験で経験したことは、中学校の生徒とかかわるときにも必ず役に立つと思う。

●認知症のAさんは、10分おきに私の名前を尋ねてきた。そこで、私の名前を既存のものに例えたり、名札があることを教えたりすることで、名前を覚えてもらうことに成功した。発達障害のBさんは「目標は今100円で買えるのかな～」が口癖だった。「100円じゃ買えませんよ」と返しても良かったかもしれない。しかし私は、突き放した言い方に感じたので「私も分からないんです、また調べておきますね。」と言うようにした。

Aさんへの対応もBさんへの対応も、認知症や発達障害があることを事前に施設の方から聞いていたからできたことである。そのため、誰がどんな特性を持っているのかを把握しておくことはとても大切であると思った。今回学んだことは教育現場でも生かせると思う。子どもたち一人ひとりの個性をしっかり把握し、子どもたちが楽しんで授業に取り組める工夫を仕掛けていきたい。

●介護等体験を通して、自分の中で大きく変わったと感じるのは人に対する見方である。支援施設に行く前は、「就労継続支援」というと、障がいを持った方が、健常者に比べできないことが多く、雇用契約を結んで働くことが出来ないために利用する施設なのだろうと思っていた。しかし、利用者の方は障がいを持っているだけでなく、触法の方など、様々な方がいた。僕は、そういった方々の出来ないところばかりを見て、支援する必要があるのだと感じていた。実際にはそ

うではなく、できないことが多いことはもちろん分かった上で、できることを見つけて、できることを伸ばす支援をしていると知った。

自分にだってできないことはたくさんあるので、できないことは人それぞれの個性だと捉えて、できるところに目を向けていくことが必要だと考えた。この体験を通して、自分の価値観が変わっただけでなく、すべての人に対して、良いところを見ていこうと思った。教員になるにあたって必要なことが、介護等体験で学べたように思う。

●この体験で、教員になる立場として、ハンディキャップを持つ人に限らず、すべての子どもたちに対して、理解を示し、子どもの気持ちに耳を傾けられるようになるための経験という意義を見出すことが出来た。特に最近は、子どもを取り巻く環境が多様化しており、教育現場において、今まで以上に児童生徒理解が重要になってくると考える。私も、中学教員になれば、多感な時期を過ごす子どもたちに対して、理解する姿勢を忘れずに、多様で柔軟な考え方を持って接することのできる教員になりたいという気持ちが芽生えた。

今回の介護等体験で学んだことを糧に、私も、子どもたちひとりひとりの「できる」「得意」を生徒と一緒に発見していきたいと思う。

●利用者さんとの関わりの中で学んだことは、家庭環境や身体的・精神的に問題を抱えていたとしても、自分が輝くことができる場所を見つけて一生懸命に頑張ることの大切さを学びました。自分の得意なことを活かして働いている利用者さんとはとてもいきいきとして見えました。

また、それと同時に、施設には利用している人が毎日全員来られるわけではなく、限られた人しか来ていないという状況を見た時に、それぞれが抱えている問題は大きく、対応していくことが非常に難しいということも学びました。

今回の体験で身に付いた、相手の置かれている環境や過去のことについてなどをしっかりと考えながら接するというスキルは、教師になった時にも役立つものだと思います。

高齢者や障がいのある方とほとんど接する機会のない学生にとって、介護等体験そのものが多様な人々、個性、価値観があることに気づく機会となるだけでなく、高齢者や障がいのある方を身近に感じ社会で共に生きる存在であることを認識する機会となっています。

介護等体験で得た福祉に関する知識や理解は将来に活かせるものであり、体験で出会った方々の姿や事前に持っていた自分の先入観への気づきから、教師にふさわしい人権尊重や道徳観を身につけ、偏見、差別のない社会づくりを生徒に伝える意識が芽生えています。

令和6年度につきましても受入にご協力いただきますようお願い申し上げます。

